

「ゴリラ」とA I

「ゴリラ」というタイトルのロック・アルバム。わたくしは四枚あげられますが、皆様はいかがですか。

「ゴリラ」については一旦置きまして、2018年の内閣府調査によると、子どもたちの悩みの相談相手として、一位が友だちから母親に変わったとのこと。お母様方の歓喜の声が聞こえてきそうですが、それとは別に、青少年研究所・第一生命経済研究所の調査で「友だちと意見が合わないと納得するまで話す」は、2002年50.2%が2012年には36.3%。2023年はどうなっているか、実に心配です。早稲田大学の文学学術院の石田光規教授によると、今の若者は「一見友だちがたくさんいるように見えるが、なかなか本音を出せない。否定されるのが怖い。相手との距離感が変わるのが怖い。置きにくい関係を作っておく」とのこと。どうやら、「他人」とのつきあい方がとても難しいのが現代の特徴みたいです。そうした中だからこそ、A Iという他者が、人間の代替としてもクローズアップされているのかも知れません。

A Iはあらかじめ読み込ませた大量のデータに基づき、新しい情報をアウトプットするので、スマートフォンの予測変換に似ているといわれます。スマートフォンに「よろしく」と入力すると、次に来る単語として「お願いします」が提案されます。それは統計学的にその確率が高いと学習しているからで、A Iはさらに多くのデータに基づいた「予測変換」をすることで、常に適切な回答や提案をしてくれるわけです。ホントウに、子どもたちにとっては、最高の友だちと言えるかも知れません。

ここで、唐突だった「ゴリラ」に話題を戻しますが、ゴリラの特性から人間の特性を考える人類学者の山崎壽一氏によると、我々の仲間、霊長類ゴリラが繁殖を目的とした集団は作っても、群れを離れればその関係は切れてしまうし、他の集団との交流がほとんどないのに対し、人間は「友情」を発明することで社会を作り、大きく飛躍したそうです。そして、その山崎氏がA Iと友だちについても述べています。「A Iは人間のような振りをするのが上手い。人間の行動を学習して人間のように振る舞う。ところが、ここにパラドックスがある。友というものは考えもしない意外なことを言ってくれるからこそ友」つまり「友だちは新しい気づきをもたらしてくれる」から意味があるようです。他人のやさしさが社会の多様性を生み出し、人類を発展させたことは間違いないようです。

ちなみに、私がA Iなら、「よろしく」というキーワードをいただければ「哀愁」と続けます。「他人」というキーワードには「山屋他人」と即答します。補足しますが、山屋他人は大正中期の連合艦隊司令長官です。「他人」という変わった名前は、彼が生まれた幕末維新の頃、父親の厄年に生まれた子どもは一旦捨て子にして他人に捨ててもらわないと満足に育たないという迷信があったそうで、父親が捨てたり拾ったりするのが面倒なので「初めから他人としておけばいいだろう」と命名したそうです。そうそう忘れない内に、ゴリラのタイトルで一番好きなのは、「ボンゾ・ドッグ・バンド」のデビュー盤です。

まあ、（上から読んで下から読んで同じになる）回文を生徒に授業で作らせるために尋ねたとして、「世の中ね顔かお金かなのよ」って答えるA Iがいたなら、個人的にはそのシニカルさは嫌いではないですが、友だちにするかは留保したいものですね。

令和5年9月5日 大村城南高等学校長 中小路尚也